



「知らなかった」その先へ ～ハンセン病をめぐる人権～

絵画を通してハンセン病問題を知るきっかけづくりとして、令和5年2月28日から3月12日まで、国立療養所菊池恵楓園絵画クラブ「金陽会（※注）」の作品展、「知らない」を観に行こう。v o l . 10」を岩戸山歴史文化交流館で開催しました。

ハンセン病問題とは

ハンセン病は「らい菌」による感染症ですが、その感染力は弱く、非常にうつりにくい病気です。現在は治療法も確立し、早期発見と早期治療で後遺症を残すことなく完治できます。

かつて日本では、国の政策によりハンセン病患者を官民一体となって探し出し、強制的に全国各地の「療養所」に隔離し、所内においてもさまざまな人権侵害が日常的に行わ



▲来場者の様子

れていました。また、患者が隔離前に生活していた自宅等は真っ白になるまで徹底的に消毒作業が行われていたことなどからも、人々の中に「ハンセン病は恐ろしい病気である」という誤った認識が広がり、患者のみならずその家族もいわれの無い厳しい偏見・差別の対象とされてきました。これらの政策は、ハンセン病に対する特効薬が開発された後にも続けられました。

平成8年の「らい予防法」廃止により、約90年間続いた強制隔離政策により、令和4年5月1日現在、全国の療養所には900人以上の入所者が生活しています。みんな治癒していますが、社会に根強く残るハンセン病患者への偏見・差別のために退所することができずにいる人たちがいます。隔離の際に家族に迷惑がかかることを恐れて肉親との関係を断ったため、帰る場所がない人たちがいます。ハンセン病問題は今現在も続いている問題なのです。

（※注）金陽会Ⅱ昭和28年に発足した、菊池恵楓園入所者による絵画クラブ。独学で描かれた豊かな感性あふれるその作品群は「光の絵画」とも呼ばれ、保存活動により現在900点以上が保管されている。

る問題なのです。

「知らない」を知った私たちにできること

「金陽会」の絵画には、ハンセン病で社会から隔離されてもなお日常を生きた人々の思いが息づいています。今回、絵画を通してハンセン病問題の一端を「知る」ことができました。

どんな病気でもそれを理由に人としての権利が奪われることはあってはなりません。ハンセン病に関わる偏見・差別をなくすことは、この社会で暮らしている私たち全員の責任です。このような差別を繰り返さないためにも、私たちは事実を正しく受け止め、問題に真摯に向き合う必要があるでしょう。

そして一人一人がお互いの人権を尊重し合える社会のためにできることを考え、身近なことから実践していくことが大切ではないでしょうか。



▲絵を観て意見を出し合う子どもたち

来場者の声

●ハンセン病問題とは何か、何があったのか、私たちが犯してきてしまったことは何かを考える入口になった。もっと多くの人に見てもらいたい。もっと学びたいと思えると思う。（70代）

●人権がふみにじられていたこと。とてもおかしいことがまかりとおっていたこと。真実を知り、これからの自分の行動につなげていきたいと思いました。（50代）

●当事者に「差別はなくならない」と思わせてしまっている現実を、私や子どもたちから変えていきたいと思いました。（20代）